

知識探訪

多民族社会の横顔を読む
協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

マレーシア社会科学学会と国際マレーシア研究会議

吉村真子 (法政大学社会学部・教授)

マレーシア社会科学学会 (Persatuan Sains Sosial Malaysia: P S S M、英語名称は Malaysian Social Science Association) は、1978年に設立された学会で、マレーシアの主だった社会科学系の研究者が参加している。

初期の会長 Syed Husin Ali (当時、マラヤ大学: UM) はマレーシアのエスニック問題を論じる優れた社会学者で、社会・政治運動でも有名である。次の会長 Jomo K.S. は UM 教授から国連に転身。彼は UM 時代から国際的に著名な経済学者で、国内で影響力もある有名人ただけに政府に煙たがられていたが、ILO (国際労働機関) 事務局長の候補となった時にはマレーシア政府も全面支援していた。

その次の会長 Abdul Rahman Embong (マレーシア国民大学: UKM、現在は名誉教授) はアジア新中間層の研究で有名な社会学者で、長年 UKM の IKMAS (マレーシア・国際研究) 研究所の運営と研究活動を担い、マレーシア研究における UKM の地位を築いたとも言える。後を引き継いだ Mohd Hazim Shah (UM) は理工系の教授で自然哲学も含めて P S S M の幅広さと奥行きを示す存在であり、長年 P S S M に貢献してきた静かな思索型の彼のスタイルはダイナミックな Rahman Embong とは対照的であった。

そして昨年、会長に就任した Rashila Ramli (UKM) は政治学・ジェンダー研究の教授で、P S S M 初の女性の会長である。彼女は UKM の IKMAS と IKON (西洋研究) 研究所の所長を兼任。国連の女性の地位向上の会議でも国の代表として出席し、東南アジア・アジア太平洋のジェンダー団体の連合でも役職に就き、国際的なネットワークと大学行政の手腕も認められている。

P S S M は学会として年次総会や折々の講演・ワークショップなどを実施するほか、隔年で国際マレーシア研究会議 (The International Malaysian Studies Conference: MSC) を 97 年から隔年で開催。マレーシア国内はもちろん欧米・豪州・日本などの研究者も集うマレーシア研究では最も重要な国際会議となっている。

昨年 8 月の第 9 回の MSC 9 は東海岸のトレンガヌ大学で開催。48 パネル、200 以上の論文報告という規模で、テーマもマレーシアの社会、政治、経済・貧困、国際関係、ジェンダー、教育、先住民、農村、メディア、人材育成、環境など多様で、半島部のケースに限らずサバ、サラワクの問題もさまざまに議論された。同会議の使用言語は英語とムラユ (マレー) 語で、PSSM も現地の大学院生も含む若手研究者が国際会議で発表する良い機会と位置付けている。

基調報告は 3 名で、Rahman Embong 元会長がマレーシアの発展と社会科学について講演をしたほか、Hans-Dieter Evers 名誉教授 (独のボン大学) がマレーシアと南シナ海について、Rashidah Shuib 教授 (USM、ジェンダー研

究) がマレーシアの発展とジェンダー問題について話された。とくに基調報告でジェンダーに関するテーマが取り上げられたのは MSC 初であり、ジェンダー研究者から大きな拍手が上がった。

同会議は大学の研究所などが組織した企画パネルのほか、個人報告はテーマでまとめてパネルを組む形になっているので、海外からの参加も比較的しやすい形になっている。今回、企画パネルは 17 と多く、UKM、UM、UMS などマレーシアの大学の研究所のほか、ドイツの大学などもパネルを組んだ。

日本の国際交流基金 (JF) のパネルで筆者も報告、会場での議論も活発だった (多謝!)

P S S M 初の女性の会長 Rashila の下で初のジェンダー問題の基調報告や数多くの海外の研究機関の企画パネル、ユネスコ支援の若手研究者パネルなども生まれ、彼女の国際的ネットワークの手腕も示された会議となり、開会と閉会での彼女の会長挨拶を聞きながら、長年の友人としても感慨深いものがあった。

今回は東海岸初の開催となり、Rahman Embong 元会長のご厚意で海外からの参加者はトレンガヌ州のスルタンのハリラヤ祝賀会に招かれるなど、温かいホスピタリティにあふれた運営であった。

MSC は、国内外のマレーシア研究者が一堂に会し、マレーシア研究の動向や研究者の近況を知り、交流や意見交換を行う貴重な場である。「No Paper, No Presentation」の原則も研究重視の方針がうかがわれる。会議後には大学院生など若手の論文執筆のワークショップを開催するなど、次世代の研究者の育成・教育も重視している PSSM の理念もうかがわれる。

P S S M は、マレーシア研究の学会として学術研究の振興のみならず、若手研究者の教育や国際学術交流に取り組み、そして研究・教育の自由や大学自治の問題などについても発言している。そうした積極的な取り組みがあってこそ、さまざまな学術研究の議論の場が確保されることになるのだろう。

< 筆者紹介 >

1961 年東京生まれ。東京大学大学院経済学研究科修了。博士 (経済学)。専門はマレーシアの経済発展と労働力構造。マレーシアの移住労働、エスニシティ、ジェンダーについて研究している。著書に『マレーシアの経済発展と労働力構造』、『移民・マイノリティと変容する世界』(宮島喬と共編) など。日本マレーシア学会 (JAMS) 運営委員。東南アジア学会理事。